

2021.7.25

ご報告：7/24 第23回働学研（博論・本づくり）研究会

十名 直喜

第23回働学研は、東京五輪開幕早々の7/24（14:00～17:00）に開催され、下記25名にご参加いただきました。

（敬称略）岩田、太田、小野、片山、金井、聴濤、岸本、木林、熊坂、小林、佐藤、澤、槌田、程、中谷、中野、波多野、濱、平松、藤井、藤岡、松浦、守友、横田、十名、

7/24 第23回 働学研プログラム

発表15分+議論15分=30分/本：計180分、司会：十名、画面：澤

第1分科会 「生命の生産と再生産」（エンゲルス）への現代的眼差し 14:00～15:00

横田幸子：「人類進化と家族」序章4 家族進化論をめぐる論点とその変遷」

片山勝己：「企業内学校論の体系化に向けて 一博論化構想メモ」

第2分科会 環境行政&環境教育への働学研アプローチ 15:00～16:30

程 遠紅：「博論第6章 中国における環境教育の現状と課題」

濱 真理：「基礎自治体の廃棄物・環境行政」（大阪市役所33年体験をふまえて）

藤井敏夫：「資源循環と廃棄物問題」（愛知県環境行政30年をふまえて）

特別企画 16:30～17:00

参加者座談会：「池上先生との交流や思い出を語り合う会」

2つの分科会では、5本の発表・議論がなされ、大いに盛り上がりました。

第1分科会の2本は、数十年にわたる働学研の成果を体系的に編集・披露されたものです。

横田さんのご体調がすぐれないなか熱弁を振るわれ、家族進化論をめぐるさらに深める質疑応答となりました。

片山さんのご発表も、スリル満点。大企業のなかでまとめられた20数万字の研究成果を、どう体系的に編集するか。その舞台裏を率直に語っていただき、議論もヒットアップ。

第2分科会の3本の発表・議論は、うまくかみ合い、実に面白いものとなりました。ごみ問題を軸とする環境行政と環境教育、さらに日中比較論は、期せずして、比類のないシンポジウムになったと感じています。ごみ分別という日々の実践が、市民の環境意識やライフスタイルをどう変えていくか、レジ袋有料化のインパクトと比較しながらの議論は、圧巻でした。

最後に特別企画として行われた参加者座談会では、ご参加された方々（下記20名）に、

これまでの60年余にまたがる池上先生との交流、思い出などを語っていただきました。

(敬称略) 太田、小野、片山、金井、聴濤、岸本、木林、熊坂、小林、澤、槌田、程、中谷、中野、濱、平松、藤井、松浦、守友、十名、

20歳代半ばから90歳近くにまたがり、青壮老の様々な視点から語っていただきました。京大、基礎研、社会人大学院、市民大学院、働学研など、1950年代(池上先生の大学院生時代:聴濤)、60年代早々(助手時代:中谷)から、最近に至るまで。

それを機に、米寿お祝いメッセージも数本いただき、小生の方でメッセージ集に編集中です。ぜひ、十名(tona@iris.eonet.ne.jp)までお送りください。

なお、働学研についての下記の感想・コメントを、終了後の半日ほどの間に、4本(岸本、中野、小野、波多野)いただいています。いろいろと面白く興味深い視点が示されていますので、紹介させていただきます。

どうか、よろしく願います。お大事に。(十名)

<7/24 働学研への感想・コメント>

「本日の「働学研」、ありがとうございました。経済学部と同窓会のような賑やかな研究交流(指導・共学)でもありましたねえ。槌田さんと藤岡淳さんも『常連メンバー』なんですねえー。

横田さんは、体が少々しんどそうでした。心は「錦」だったかも？

よくまとめられていたとも思いました。但し、氷河期との関連が入っていなかったのが残念でもありました。

僕は、途中(第二分科会直前)で中座しました。用事が入っていたなからです。この歳になると「雑用」も増えています。十名様には、大変な失礼だったかも？

今後とも長くお付き合いをお願いします。外は猛暑続きですから、70代の我々もご自愛していきましょう。今日は、お心配りをありがとうございました。沖縄は、暴風雨下にあるようで、ちょっと心配です。」 (7/24 岸本正美)

「本日も働学研に参加させていただき有難うございました。

大学卒業以来長らくご無沙汰していますが貴兄が粘り強く、色々な困難を乗り越えて「働学、研」を実践して来られたことを今日改めて感じました。

僕も色々なことが有りましたが、貴兄の努力を思うと頭が下がります。

「人新世の資本論」を読んだことから貴兄の主宰されている働学研を覗かせていただくことになりました。今日は質問などするつもりはなかったのですが時間があるように思ったのでつい手を挙げてしまいました。場違いな質問であったようにも思います。ご容赦ください。」 (7/25 中野正己)

「いつもお世話になります。「池上先生との思い出」を送付します。よろしくお願いいたしますします。

8月の動学研で、可能ならばお勧めいただいていた報告をしたいと思っています。タイトルは、「学習と研究——わが生涯の転換点」です。よろしくお願いいたします。」

(7/25 小野 満)

「第1、第2とも、いい時間配分で、深い議論が交わされました。

断片的ですが、いくつか、考えたことを書きます。

第1：横田報告は、理論的で刺激的です。家族進化論については、まださまざまな仮説がフィールドワーカーから提出されて定説が固まっていない段階と思います。その中で、どのような方向性を提出すのかが見所のように思いました。

例をあげると、横田さんは家族形成の重要な要素として「発情期の喪失」をあげていますが、そのところは、さらに多面的に考察されるべきではないかと思います。ここで「発情期の喪失」といわれている事情は、ヒトにとって「性行動の拒否」を意味するのではなくて、特定の発情期を待たずとも「常時性交可能」な能力の獲得であり、性を隠蔽すると同時に独占させてオスをつなぎ止めることによって、子どもの成育に有利な条件を作り出すという見方もありえるでしょう。

そうすると、それは「進化の傷跡」ではなくて、まさに人間的な進化と特徴づけられるかもしれません。そこに両性の「齟齬」というよりもより積極的な文化的関係性（例えば「愛」…それをどう定義するかはさておき…）の発祥の根拠があると考えられるかもしれません。

また、父系性、母系制についての議論も進行中です。ホモ・サピエンスの家族形成については、生物学的な系統いかんは重要な問題です。ただ、現在に至る家族形態の多様な拡散を見れば、生物学的な起源や系統のほかに、その後、自然との関係性、および隣接する民族集団との共生・競合関係によって、多様な社会的展開を遂げていく形を見ることも、欠かせない論点ではないでしょうか。それは、社会の基本原則（所有とか平等とか権利、また女性の位置づけなど）と関わりがあるからです。

生物学的にも、単系統ではなくて復系統の可能性はないのか、あるいはごく初期に基本的に異種の複数の系統に分化したのかもしれない、などと考えたりします。

人間社会の家族的構造の多様な形態の成り立ち原理を発見するにはまだ証拠が足りないでしょうが、その多様性の決め手になったかもしれない要因の幾つかでも提出できれば、重要な貢献になると思います。

第2：自治体の環境行政について、長年環境行政にたずさわった方々の現場に即した深い意見交換に感銘しました。と同時に、気がついたのは、どなたも議会の話をされなかったということです。日本の環境政策が、事実上、ほとんど行政機関のイニシアティブに発している、つまり行政的対応の話であるような印象を受けました。この分野にはくわしくな

いので、間違っているかもしれませんが、行政があつて市民があるというような関係、さらにいうと政治の不在を感じました。日本は、首長—行政—市民で動いていて、議会が機能していないということの証しであるかのようです。

その意味で環境問題には、日本の明治以来の「近代化」の政治過程の課題が集中的に出ているのかもしれませんが。「御上」が動いてはじめて問題が動く。これをマイルドにいうと、今日も語られたように、「国の調整が求められる」となります。あるいは意識のある首長が出たときにはじめて何かが変わる。人々は常に耐えに耐えるか、耐えきれずに暴発するか、しかない。

物事の動き方と決まりかたが、足尾銅山以来ほとんど変わってない。もっと極端な表現をすると、日本は民主主義社会じゃないのだということです。」 (7/25 波多野 進)